

法政大学審査学位論文の要約

想像と観入の現象学

——知覚と想像の差異をめぐって——

京念屋 隆史

本論文は、心の中で何かについて思い浮かべること、すなわち想像に関する哲学的探究が取り組むべき問いとして「（想像と知覚の）識別問題」を提起し、それに対する三種類の解答の候補を A・B・C の三部構成で順番に検討していくものである。識別問題というのは、想像と知覚との差異は何か、想像はどのようにして知覚から識別されているか、という問いである。心の「中」で思い浮かべられたもの（＝想像）に固有の弁別的特徴を明らかにするには、他方で心の「外」に見られたもの（＝知覚）はその同じ特徴をもたないことが保証されていなければならない。しかし、このような条件を自らに課した上で探究を始めてみると、この問いが見かけに反してかなりの難問であり、これまでの哲学史の中には適切な答えがないことが明らかになる。

本論文 A1 では、想像の識別理論として、我々が「媒介説」ないし「統握説」と呼ぶ見方を検討した。これは、想像は何らかの心的な ^{イメージ} 像 を介して対象を思念するものであり、対象を媒介なしに直接思念する知覚とはその点で識別されているという見解である。こうした媒介的・像的な構造の有無によって想像と知覚を区別するこの見方（これは「構造説」と特徴づけることができる）は、写真や映画などの物的な像の延長上に心的な像を捉えようとしている。しかし、こうした物的像から心的像への類比は、フッサールも躓いた「統握の任意性の問題」という次のアポリアに突き当たる。物的像の意識であれば、それは所与の素材に対する「統握」（～として捉える）の観点から十全に説明することができる。すなわち、絵の具やインクのしみなどの素材でできた像を、目の前にある単なる事物として統握することもできるが、それを超えて主題そのものを映し出す像として統握することもできる。そして主観は、この二つの統握（像の手前にとどまるか、像を通り抜けていくか）を任意に切り替えることができる。それゆえひとは、スクリーンを介して・それを通り抜けて映画の世界の中に入り込んで見ている（これは「観入」の意識と呼ばれる）ときにも、そこから翻って、こちら側の世界にあるスクリーンへと還ってその現実存在に気づきなおすことができる。しかし、物的像には見られるこうした任意性は心的像には存在しない。つまり、空想の世界へと入り込んでいる状態から抜け出て、それを映し出している（と想定された）心的なイメージそれ自体を眺めようとしても、そのような媒介的な像は心の中にすら見出すことはできない。

このことから分かるのは、（「想像」や「心像」といった語の見かけに反して）想像は像の一種ではなく、むしろ知覚と同じく対象を媒介なしに直接思念する作用だということである。このようにして想像が知覚と同じ直接的・非一像的な構造をしていることが明らかになった以上、我々の探究にはこれ以降、想像と知覚の識別を考え

なければならないのにその両者を構造上平等に扱わなくてはならない、という困難な制約が課せられることになる。この困難な制約をクリアするために、我々は今度はその識別根拠を、構造ではなく内容、現象的内容、すなわち対象の意識への現れ方の差異に訴える説を二つ見ることになる（先に見た構造説に対して、こちらは「内容説」と特徴づけることができる）。

まず本論文 A2 で扱うのは、意識に与えられた現象の素材的内容による区別、すなわち素材説である。素材説は、知覚表象と想像表象とではそもそもの素材の段階で異なるものが用いられているからこそ、それらが等しく直接的な構造のもとで統握されようとも両者の識別が可能になる、と考える。しかし、物的表象であれば絵の具やインクのしみなどが素材にあたるが、それと同じようなものが知覚であれ想像であれ意識表象には存在するのか、という疑念が素材説にはつきまとい、その疑念は我々が

「志向性の反論」と呼ぶ次の反論へと結実する。これは、まず像の素材だけが有意味に（これは「夕日」を表した絵だ、などと）与えられ、その後でその像が実際に夕日についての想像として立ち現れる、という段階的な順序をとることが、物的な像では起こるが心像では起こりえないではないか、という反論である。しかし素材説は、この反論をクリアするようにして、意識表象の素材をある「透明な」素材として構想する。すなわちそれは、ある表象を成り立たしめているにもかかわらずその素材それ自体を知覚することができない素材であり、ゆえに像を通り抜けて主題を観ることしかできない透過的な素材だとされるのだ。この「透明な素材」という発想は意識という表象の特異性、その物的表象とは隔絶したあり方を確かに捉えているのだが、しかしその結果この概念は自らの中に形容矛盾を背負い込むことになる（およそ不透明でないような素材などというものはない）。

しかし、意識表象の素材の「透明性」というのがその比喩の破れにおいて言わんとしているのは、意識像はそもそも素材なるものをもたないということであり、それゆえに意識はある意味では「表象」ですらないということである。このことから、先に見た「志向性の反論」（知覚や想像においては「像」それ自体を見ることができない）が言わんとしているのが、心的 ^{イメージ} 像 とは像ではなくむしろ対象そのものに付けられた名前である、ということだと分かる。つまり我々は心的イメージを介して対象を見るのではなく、想像するとき対象はむしろ直接、媒介なしに意識に与えられるのであり、その心の中に現れた対象そのもののことを我々は「心像」 ^{イメージ} などと呼び習わしているのだ（このことはフッサールの「ノエマ」概念の解釈を通じて確証された）。

本論文 B1 では、かくして破綻した素材内容説の代わりに、想像と知覚の識別根拠を現象的内容に求めるもう一つの説を検討した。ここで、いま得られた教訓——心的イメージとは対象そのもののことである——を踏まえると、我々はその根拠を、内容は内容でも、対象そのものの現れ方の内容の中に求めなければならないことになる。そのような立場が一つある。それが、（知覚と違って）想像の対象は観察されない、というサルトルの「準観察」のテーゼである。我々はまず、このテーゼをありうる批判から最大限擁護し、それを「世界の世界性の欠如」という、およそ世界が世界として成り立つための条件にまつわる超越論的な言明として捉え返す。知覚世界や像の世界は、まだ見えていない範囲についても観察によってその細部を埋めることができ（＝地平性）、また、すでに見えている範囲についても、それが「実は」違ったあり方をしていたと後から判明する余地を残している（＝現れと真実在の区別）。ところがこのような奥行きや背後を想像は欠く。この点が準観察テーゼの根本洞察として取り出された。

しかし本論文 B2 では、かくしてその根源的射程において明らかになった準観察テーゼに対して、今や反対弁論が開始される。小説や絵画の世界は、その世界が作りものである、作者によって描かれた範囲以上の奥行きが存在しないような張りぼてにすぎないという見方をとることも確かにできる。しかし読み手は、そのような醒めた態度をとる代わりに、その作中世界に「入り込んで」見る態度（＝観入的な態度）をとることができ、そのとき世界は、未だ描かれていない範囲もあらかじめ確定した細部をもち、それが「観察」によってしだいに開示されてゆくというような奥行きを備えた真正の世界として現象する。このことは、ある世界が世界性をもつかどうかというその世界に属する本質的特徴に思えたものが、そのじつ、それを見る視点によって——すなわち、その世界を外側から眺めるか、内側から生きるかによって——その姿を変えることを示している。我々はこれを「（世界の世界性にまつわる）視点依存性テーゼ」と呼び、これによって、世界の内側／外側からの眺めの立脚点の相違を「子供と大人の対立」という形で象徴的に描き出しつつ調停した。この新たな見地のもとでは、B1 で見た準観察テーゼは外側から眺められたとき限定の世界の局所的な描像であることになり、我々が求める識別の一般理論の候補はふたたび白紙に戻るようになる。

本論文 C では、かくして想像もまた知覚と同等の真正の世界性をもつことが明らかになった今、その世界というあり方をもとにした「多世界説」という独自の識別理論を提唱した。この見解は、この現実の知覚世界の中に想像ないし像の世界があり、

その中にさらに像の世界があり……といったように世界同士が多重に入れ子構造をなしているという事実に基づいている（それゆえこれは構造説の一種である）。想像が世界性をもたない張りぼてに見えたのは、それが我々の知覚世界の中に入れ子になった世界として、その外側の視点から世界越しに眺められていたからである。しかし実際には想像世界もまた世界であり、そして世界はその入れ子のどの階層をとっても、そこで起きている内容の点では互いに区別ができない。内容説が失敗したのはこのためであり、だからこそ、それ単体では互いに区別のできない世界同士の、その外的な関係だけが識別を説明する。すなわち、世界同士の境界線を跨いで世界越しに到達された世界が想像の世界であり、境界線を跨ぐことなく到達可能な世界が知覚の世界である。これが多世界説であり、我々はこれを想像と知覚の最終的な識別理論として提示した。

ところで多世界説は、どんな作用も——ゆえに想像だけでなく知覚も——そのつど一つの世界を開く、という原理から出発する。想像の諸世界を説明するのに適していたこの複数性の原理はしかし、知覚のほうは、とりわけ、我々のこの客観的な知覚世界が複数ではない、唯一にして同一の世界として成り立っているという事実のほうは説明できないのではないかという疑問が浮上した。そこで我々は、世界の複数性を^{マージ}刈り込むもう一方の原理として「世界の統合理論」というものを導入した。そのつど開かれた複数の諸世界は、想像世界・知覚世界を問わず事象内容的に適合する世界同士が統合されたとき、想起と知覚によって継続的に構成されてゆく一つの——ただしその階層に相対的な——客観的世界を作る。他方、内容的に矛盾する世界同士は統合されないままにとどまることによって、例えば夢の世界は、我々の客観的世界とは混ざり合うことなく別個の世界としての統一性を保つ。このようにして、多世界説がもつ、想像の識別理論を超えた、知覚理論ひいては世界理論としての射程が明らかになった。